

Apotalk



「福島 の復興支援薬局 5年間の軌跡」

ならは薬局（福島県双葉郡）管理薬剤師／飯塚 織恵氏

05

SCOPE

「薬局トラブル相談室」

JMP法律事務所 赤羽根 秀宜 先生（弁護士・薬剤師）

06

DISCOVERY

「薬局探訪」

株式会社ツバキファーマシー（ツバキ薬局和泉店）

2025

No

100



大阪府南部の「泉州」と呼ばれるエリアで8店舗を展開するツバキファーマシー（本社大阪府泉南郡）。今年4月には、泉州地区では初めてとされる調剤ロボットを和泉店に導入しました。調剤業務の効率化を図り、薬剤師業務を「対物」から「対人」へとシフトすることで、服薬指導などを通じて患者さまに向き合います。同店の管理薬剤師である森田貴大氏と同社経営の次世代を担う薬剤師の椿本勝利氏に、調剤ロボット導入に伴う薬局現場の変革と今後の展望などについて伺いました。

Discovery

医療DXの一環で調剤ロボット導入、患者さまに加え従業員にも「安心」を提供

株式会社ツバキファーマシー ツバキ薬局和泉店（大阪府和泉市）

管理薬剤師 森田 貴大 氏

薬剤師 椿本 勝利 氏

基幹病院の処方箋中心に応需し 多種多様な疾患抱える 患者さまに対応

——ツバキ薬局和泉店は和泉市の基幹病院である和泉市立総合医療センターに隣接しています。

森田 同センターは旧和泉市立病院の老朽化による建て替えて、2018年4月に市内府中町から現在地に新築移転したのに伴い名称も変更されました。弊社は1998年7月に旧病院が院外処方箋の発行を開始したのと同じ時期、旧病院近くに「ツバキ薬局（府中店）」を開局しました

が、病院の移転に合わせて現在地に移り、薬局名も「ツバキ薬局（和泉店）」へと改称しました。

——森田さんは病薬のご出身とか。

森田 薬剤師としてのキャリアは17年ほどですが、大学病院などで約10年間、病院薬剤師として勤務しました。病薬時代はがん患者に接する機会が多くありました。がん患者には病院で看取られる方もいれば自宅に戻られる方もいらっしゃいますが、自宅に戻られた患者さまの多くは、その後の様子が分からなくなります。また生活習慣病を抱える患者さまなら、受診された際のデータなどで様態はわかりますが、病院の中にいると、その方の日常生活まではなかなか見えません。しかし市中の薬局なら、患者さまへの介入をより深めることができるのではないかと。そんな思いから薬局薬剤師への転身を決断し、2018年に弊社に入社しました。

——地域の基幹病院からの処方箋応需には、そうしたキャリアが活かされる場面も少なくなさそうです。

森田 1日平均の処方箋応需枚数は、総合医療センターを中心に、隣接する循環器内科の診療所などから150枚ほどです。当薬局の在籍薬剤師数は非常勤を含め10人

管理薬剤師
森田 貴大 氏



ですが、通常は6～7人の薬剤師で対応しています。基幹病院であるだけに、実に様々な患者さまが多種多様な軽重の疾患を抱えておられます。診療所からの処方箋も心疾患系の薬剤の種類が多く、幅広い知識と経験が必要ですが、見方を変えれば新卒薬剤師にとっても十分な学びの環境が整っている薬局かと思っています。

泉州地区では初の調剤ロボット設置で「対物」から「対人」業務へのシフト強化

——その辺りに調剤ロボット導入の背景もありそうです。

森田 今年の4月に導入し5月から本格稼働しています。グループ店舗ではここが初めてで、泉州地区の薬局全体を見渡しても最も早い導入と聞いています。グループ内ではツバキ薬局（和泉中央店）にも設置が完了しています。

導入しているのは株式会社湯山製作所の自動薬剤ピッキング装置「Drug Station」という機種です。処方箋の情報に基づいて、薬剤師の代わりに、オーダーに応じた薬剤ピッキングを自動で行ってくれます。機能としては払い出す薬品トレイが目の前に出てくるので薬品を探す必要がありませんし、すばやくピッキングしてくれます。また、それだけではなく、ピッキング履歴を残す事も可能なので機械化されていてもその点の安心感があります。他にも、入庫やロット番号の管理、使用期限管理も出来るので、業務が効率化されます。

薬局現場の作業効率化と薬剤師の働き方改革への貢献には大きいものがあります。

地域に密着した薬局を目指す弊社は医療DXの推進にも熱心で、調剤ロボットの導入は国が進める薬剤師業務の「対物」から「対人」へのシフトにも大きく貢献できる環境整備の一環と捉えています。

また総合医療センターでは現在、2026年3月の完了を目指して増改築事業が進められています。患者さまのさらなる増加が見込まれ、調剤ロボットの導入には、そうした背景もあります。

椿本 私は今年3月に大学を卒業したばかりですが、薬学教育の中ではまだ、調剤ロボットの話題が出るまでには



至っていません。ただ、実際に調剤ロボットに接してみて、感覚的に初見でも操作がし易いのを実感しました。万が一の災害時などには電力供給の不安がつきまといいますが、薬局の敷地内には自家発電機も用意し、万全のバックアップ体制を整えています。

調剤ロボットによる調剤過誤防止で患者さまだけでなく薬局スタッフも守る

——薬局見学者も増えているとお聞きしています。調剤ロボット導入は、まさに薬局における最先端の医療DX推進の好例です。

森田 どんな専門家でも人である以上、ヒューマンエラーは避けられません。残念ながら薬剤師も規格の取り違えや薬剤名などを間違えることはあります。調剤棚の配置に慣れていない新人薬剤師だと、同じ所を右往左往して効率が悪くなることもあるでしょう。調剤ロボットの導入で、そんな「不安」が解消され、それによって生まれた「安心」を丁寧な服薬指導など、患者さまへの向き合い方へと振り向けることができます。まさに「対人」業務の強化です。そうした医療DXを推進する中で、地域医療に携わる「選ばれる」薬剤師を目指していきたいと思っています。

椿本 薬学教育の中でも調剤過誤は絶対に起こしてはならないこととして教えられます。調剤ロボットの導入をはじめ医療DXの推進は、薬剤師に「安心」を提供するものです。その上で服薬指導をはじめとする業務で患者さまに真摯に向き合う。それが本来の薬局薬剤師の務めです。

私の父は弊社の社長ですが、次世代を担うことになる薬局経営という立場から言うならば、医療DXの推進には、患者さまはもちろんのこと、従業員を「守る」という意味合いも大きいと考えています。

薬剤師
椿本 勝利 氏

